



たまには  
線路のことも  
考えてみようよ  
・・・の巻

# うたてつ ノススメ⑩

歌に歴史あり・・・

- ① I've been working on the railroad (19世紀)
- ② (日本語版) 線路の仕事 (1955年)
- ③ (日本語版) 線路は続くよどこまでも (1962年)

さて、今回は新春特別企画で、誰もが知ってる「線路は続くよどこまでも」という曲の歴史を辿ってみたいと思う。左の①～③は全て同じメロディーで、大昔アメリカの鉄道労働者が歌った労働歌が日本に輸入され、最終的に現在の形となったことが分かる。過酷な労働の中で歌われ

① I've been working on the railroad  
All the livelong day  
I've been working on the railroad  
Just to pass the time away  
Don't you hear the whistle blowing?  
Rise up so early in the morn  
Don't you hear the captain shouting?  
Dinar, blow your horn.

(翻訳) 俺は鉄道で働いてきた  
日がな1日な  
俺はずっと鉄道で働いてきた  
時は過ぎ去るばかりだ  
汽笛の音が聞こえないかい?  
朝は早く起きろってな  
親方の叫びが聞こえないかい?  
ダイナ、ホーンを鳴らせてな

めた曲が、こういった経緯でこんなに楽しい曲になったのだろう。  
**過酷な線路工事のうさ晴らしに・・・** ①から順に見ていこう。是非、自分なりで良いので、原語のまま歌ってみてほしい。③の「ランラララー」の部分は「Dinar, blow your horn」がくり返される。1番のみ記載。

実は①以前に「堤防の歌(原題: Levee Song)」として堤防建設労働者が歌っていたのが、この歌の最初期のルーツらしい(年代的には1830年頃までさかのぼる?)。時代が移り、これが鉄道労働者に歌われるようになった。あの広大な大陸に線路を建設していく過程は、想像を絶するもので、どれだけの労働力を費やしたのか計り知れない。労働力不足は、他の国から強制的に連れられて来て補充された。勿論、奴隷同様の扱いで、肉体的にも精神的にもボロボロの辛さ、恨みつらみをこらえて歌うことで紛らわせていたのである。メロディが明る過ぎる気がするが、過酷な労働をしながら、やけっぱちで唄うにはこのくらい勢いが必要かもしれない。数え切れない数の黒人ブルースも、こういった労働歌をルーツとしている。ダイナは女性の名前?・・・でいいのかな??

**歌声喫茶のブームの中で・・・** おそらく戦後だと思うが、この歌が日本にも入ってきて、1955年(昭和30年)初めて日本語詞が付けられた

② 線路の仕事はいつまでも  
線路の仕事は果てがない  
汽笛の響きが鳴り渡れば  
親方は叫ぶ 吹き鳴らせ

つらい仕事でも終いには  
つらい仕事でも果てが来る  
汽笛の響きが鳴り渡れば  
つらはしを置いて息絶える

③ 線路は続くよ どこまでも  
野を超え山を超え 谷を超えて  
はるかな町まで 僕たちの  
楽しい旅の夢 つないでる

線路は歌うよ いつまでも  
列車の響きを追いかけて  
リズムに合わせて 僕たちも  
楽しい旅の歌 歌おうよ

のが②である。作詞は津川圭一という人。ぱっと見て分かるように、①の仕事の辛さ、厳しさといった内容をほぼ忠実に踏襲している。すごいのは、1番の歌詞で「仕事は果てがない」としながら2番では「果てが来る」と歌っている。その理由が「息絶える」である。息絶えて、やっと自分の仕事が終わる?ってか?・・・辛い!!

この②は、当時ブームとなった歌声喫茶でよく歌われていたらしい。歌声喫茶に関しては、自分は写真でしか見たことがないのだが、大勢

の若者たちが、同じ歌集を手に持ち歌っている。テレビもなく、大した娯楽もない時代、集団就職で東京にやって来た人たちなどの憩いの場であったことが伺える。「自分はひとりじゃない」という連帯感を感じる貴重な場所でもあったと思う。

余談だが、歌声喫茶から始まった歌声運動は、更に大きな国民的文化運動に発展していったという歴史もある。

**夢と希望の時代へ!!** この間、いくつかのエピソードもあるが割愛。テレビ放映が始まり、1962年には、現在も続く人気子供向け音楽番組に登場することとなった。それが最終形となる③だが、①と②の辛さ、苦しみは完全に排除され、ひたすら明るく、楽しい、これからの子供たちに夢と希望を与える全く新しい歌に生まれ変わった。作詞は佐木敏(当時の番組ディレクター)で、何とあのノッポさんも加わっていたらしい。自分的には、ほんの少しでも「線路のおじさんたちへの感謝」みたいなフレーズが欲しかったかなと思うが、時は戦後復興を果たした高度成長期時代、東京タワーの建設や、数年後の東京オリンピックも控えて、平和な時代を目指すのに、あえてこういった形にしたのだと思う。

納得出来る結果である。これがテレビ電波に乗り、全国に広がった瞬間、②は忘れ去られる運命となった。

是非この機会にこの歌と共に、保線労働者の大変さも子供や孫たちにも語ってあげてほしい。